

# 諦めた裏切者

柿の種至上主義

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

書きたくて書いた。

反省も後悔もしている。

# 目次

プロローグ	1
始まり	7



## プロローグ

母と慕う彼女は親ではない。共に暮らす彼らは血の繋がった実の兄弟ではない。

今いるここは、グレイスIIフィールドハウス。孤児院だ。

そして俺は、その数少ない年長者の一人。名をシエロ。  
そういうことになっている。



俺たち孤児院の朝は、朝六時に鳴らされる孤児院の鐘と

「みんな、起きて〜！朝ごはん遅れるよ〜!!」

元気いっぱいのエマの声から始まる。

「ほ〜ら〜！シエロ兄も起きてよ〜というか手伝つてよ〜」

「……………あと、五分だ。五分だけ…………」

「う〜ん…………じゃあ五分だけだからね」

「五分経ったら、諦めてくれ…………」

「それ起きる気ないじゃんっ!？」

「zzzzzzz・・・」

「二度寝するなっ!!」

後にシエルターで出会ったユウゴから「触角」と名付けられるアホ毛を揺らしながら俺をゆすつて起こそうとする彼女はいつの頃からか、朝が弱い俺を根気強く起こそうとしてくれる。年少の子どもたちもいるのだからそつちを優先しろなんてことを言ったからか、最近ではそつちも完璧にこなしつつ起こしてくるなんて無駄に器用なことをするようになってしまった。

「シエロ兄々」「起きてよ」「朝ごはん一緒に食べよ」「お腹空いた」「行くようよ」  
しまいには準備を終わらせた年少児をけしかけてくるようになったからもう大変。  
布団の上に座ったり跳ねられる中で寝れるはずもなく、

「降参降参。起きるからみんな布団から降りてくれ」

白旗をあげて安寧の地より出なければなくなる。これがいつもの恒例行事。

小さい子たちの準備を済ませて先に食堂に行かせ、自分も洗面台で冷たい水をかぶ

る。季節としては秋だが十分に冷たい水はまだ僅かに残る眠気を吹き飛ばしてくる。

頭から数秒水をかぶり顔をあげて目に映るのは、洗面台の鏡で反射して見える最早見慣れてしまった自分ではない顔。ナツトよりも少し赤みがかかった赤銅色といった感じの短髪、特に変なところも逆に美しいと言われるほど整つてもいない、普通の顔。

小さい子たちにエマやアンナ、あとギルダとかは、この髪とその色に近い優しい目が好きだと言ってくれるが自分の体つて自覚が薄いから何とも言い難い。

「おはよう、シエロ兄。朝から鏡と睨めっこしてどうしたの？」

「大方、まだ眠気が抜けてねえんだろ。シエロ兄は朝にめちやくちや弱いし」

声のする方向を見れば、朝食を運んでいる年長の男子が二人、相も変わらず落ち着き払ったノーマンとちよいちよいちをこちらをからかってくるレイ。

「おはよう二人とも。もう目は覚めたから大丈夫。さ、みんなで朝ごはんにしよう」



俺はこの場所が仮初で、嘘だらけで、残酷な真実を短くとも甘美な幸せで塗り固められた籠の中だと知っている。

レイのように胎児の記憶と現状を照らし合わせて推理し導き出したわけでも、ノーマンやエマのように“鬼”や出荷の瞬間を見て理解したわけでもない。

知っていたから。それこそ生まれる前から。俺は書物の中にたまに登場する転生者なんだろう。前の名前も、親も、兄弟も、姉妹も、恋人も、親友も、思い出せない。死んだという事実しか思い出せない。

それだけでなぜ妄想じゃなく転生者だと思うのか、その証拠は俺が今いるこの世界が何よりの証拠になる。

『約束のネバーランド』

人を殺し、食す化け物“鬼”たちの住む世界。グレイスIIフィールド（GF）ハウスという、子どもたちには孤児院と伝えられこの場所の真実は“鬼”たちが食用の子どもたちを育てるために作り上げた言わば人間プラント。あるキツカケでその事実を知ったエマたちが主人公であり様々な障害を乗り越え、外の世界で自由に生きようともがくストーリー。

俺はこの世界のことを、書物の、二次元の中にある物語として知っている。覚えている。



そして俺は、エマともノーマンともレイとも違う、俺の考えで俺なりに独自で動く。俺が動くことで物語がどう変化するかは分からない。エマたちが全滅するような大幅な変化が起きるかもしれないし、逆に原作のように全く変化しないのかもしれない。

だからといって動かない理由にはならない。俺が知り、俺が考え、俺がこうしたいと思つて行動するんだ。誰にも邪魔はさせない。

“鬼”にも、ママにも、そしてエマたちにさえも、俺の邪魔はさせない。

ここは原作とは異なる世界。正史 原作を知り、登場キャラ 人の過去を知りその未来をも知つてい  
る、本来ならばあり得ることのない異分子イレギュラーのいる世界線。I F

これはその世界で、己の命すら賭けてあることを成し遂げようとする一人の男の物語である。

# 始まり

カラン、カラン

ママの持つベルが食堂に心地よく響く。

「おはよう、私の可愛い子どもたち。こうして今日も39人の兄弟みんなで、幸せに暮らせることに感謝して、いただきます」

「「「いただきます!!!」」」」

毎日時間通り、変わることなく行われる食事の挨拶を機に、おなかいっぱい食べられる温かいごはんをみんなが幸せそうに食べ始める。

俺はバスケットから切り分けられたパンを一つ取り、マーガリンを塗る。あまり多過ぎないよう、それでいて満遍なく丁寧に。俺としてはもう少し多めか、これにジャムも欲しいところだがコレを食べるのは俺ではない。

ふと右手の袖をくいと引かれそちらを見れば、リトルバーニーを抱きかかえ小さな花を思わせるよう純粋で暖かい笑顔を浮かべるコニーの姿があった。

「ん、もうちょっとだけ待ってろ．．よし、ほらアーン」

「あくむ……えへへ、おいしい」

満足いく感じになった。パンをコニーに食べさせると、花が咲いたような見ているこつちがポカポカするような笑顔を見せてくれた。周りの子どもたちが羨ましがって自分も自分もと言っているが、今日だけはコニー限定。

コニーは幸せそうにはにかんで、俺の膝の上にリトルバーニーと一緒に飛んで乗ってきた。ドンよりも少しとはいえ長身な俺の膝にすっぽりと収まったコニーはこちらに顔を向けて、その小さい口を遠慮がちに開く。

「うふふ、コニーは甘えん坊さんね」

「だっていいでしょ、今日は」

「そうだな。さしずめ俺は、小さなお姫様の忠実な家来つてところかな」

みんなで囲む暖かな食卓、俺とママがコニーだけを甘やかしているのは今日だけ。

なぜなら今日は2045年10月12日

コニーがここG グレイスリフィールド F ハウスを出ていく日であり、

「壮絶な物語  
原作が始まる日でもある。」

????

朝食を終えた後に待つのは、電子機械らを用いたテスト。落ち着きのない4歳の子どもたちですら驚異的な集中をして臨んでいるこの状況。偏にママの教育の賜物だろう。前世の教育現場にママがいれば、さぞ素晴らしい教育者になれたことだろう。

「それじゃあ結果を返すわね。ノーマン、レイ、エマ、シエロ。凄いわ四人とも、また満点。」

フルスコアよ。」

驚異的な記録に子どもたちが驚き、自分のことのように喜んでくれる。

断トツの頭脳を持つ天才のノーマン

その天才と互角に渡り合う知恵者のレイ

抜群の運動神経と学習能力で二人を追いかけているエマ

正直この三人は普通じゃない。俺みたいに前世セレブデュータの引き継ぎしたようなある種の反則行為チートしているわけでもないのに、よく毎回フルスコア取れるとか訳が分からない。

毎日の行われるこの勉強テストが終われば子どもたちは自由時間。思いつきり遊ぶことができる。今日はノーマンに謎の対抗意識を持ったドンの発案で、ノーマン対みんなで鬼ごっこ対決になった。

????  
シエロという人間は、ここGグレイスフィールド F ハウスにおいて誰からも好かれるみんなの兄のような存在だった。ママの手伝いをよく行い、年下の子どもたちの面倒もしつかりと見る。時には悩みの相談もする。兄の理想形のような存在であった。

しかしエマ、ノーマン、レイと並ぶフルスコア獲得者であり最年長組の一人ではあるが、何も彼が最年長というわけではない。

年齢順で言えばレイ、シエロ、ノーマン、エマの順であるがそれでもみんなが彼のことを兄と呼び慕う。実際は年上のレイでさえもシエロ兄と呼んでいる状況に誰も疑問を感じてはいないのだ。

いつだったか、誰だったかが呼び出した、シエロ兄、という呼び名。瞬く間に広がり定着したのは、グレイス・リッパイルド G F ハウスの子どもたちが満場一致で兄と言えば彼、それほどまでに大人びて見えている。ぶつちやけ精神年齢が大人の域ではないかと、子どもたちから思われていた。

そんな彼は今、他の子どもたちと一緒に鬼ごっこをし、鬼役のノーマンから逃げていた。

彼の背には、リトルバーニーを抱えたコニーがとても楽しそうにはしゃいでいる。

「いっくら、舌を噛むぞ」

シエロはコニーに注意をしつつ草むらを軽々と飛び越え、時には立ち並ぶ木々を巧みに利用した立体的でアクロバティックな動きでノーマンから逃走を続ける。背中のコニーに負担がかからないよう配慮しつつ、それでいて話す余裕すらあったのだ。

年下の小柄なコニーを抱えた上でエマと遜色ない機動性を発揮するシエロに、ノーマンは内心で舌を巻く。これではコニーを抱えていなかった場合はどれ程になるのか。幼少時代に体調を崩しがちで体力が多いとは決して言えないノーマンではとても捕まえないだろう。今でさえ思考を、癖を読んで先回りをして何とかというレベルなのだから。

シエロは鬼ごっこの際、必ず誰かを背に乗せて鬼ごっこをする。圧倒的なハンデとなるはずのそれを欠片も感じさせずに遊ぶ彼は、間違いなく男子陣の中でも二番目に身長の高いドンを抑え、頭一つ抜けた身体能力を有していた。

それでもいつも通り、動きを読み切ったノーマンにシエロは捕まり、ノーマン対みんなの鬼ごっこはノーマンの勝利で幕を閉じた。





「私、書くね。手紙いっぱい書く。みんなのこと絶対忘れない。」

「私、ハウスを出て大人になったら、ママ、みたいなお母さんになるの！それでね、絶対に子どもを捨てたりしないの!!」

ママに連れられて、コニーはハウスを出て行った。

みんなに別れを惜しまれ、涙ながらにみんなで見送った。

「私、ママとか家族のみんなのことも大好きだけど、それ以上にシエロ兄のこと大好きだよ。大人になっても絶対忘れないから!」

コニーはハウスを出る最後に、そう言ってシエロに抱き着きその頬に小さくキスをしてかけるようにハウスの扉を出て行った。その後ろ姿からわずかに見えた彼女の耳は夜でもはつきり分かるほど真っ赤になっていた。

コニーの大胆な行動に騒ぐ女子たち、まただと言わんばかりの笑みを浮かべる男子たち。

「相変わらずモテモテだな、シエロ兄は」

「まあシエロ兄だし、しょうがないよ」

レイヤノーマンまでこんな風にからかつてくるのだから毎度のことながら中々收拾

がつかない。

騒ぐ年下たちの相手をしながらシエロは思考の一部で冷静に今後を考えていた。  
さあ、ここからが勝負だ。<sup>始まり</sup>